阿久比短歌の会「風」令和八年十月　文化祭短歌大会作品

老いびとが家忘ること笑ひしが
今少しづつ諾はむとす　　講師　中野富恵子

旅友の居所不明になりたれど
夢の中では先を歩めり　　南　比左子

想ひ出の半分占むる夫なれば
聞きたきことも言ひたきことも　　北中　祥子

土石流生活基盤をひと飲みに
烏有に帰した民は唖然とす　　大村　浩嗣

被災者にも救援者にも容赦なく
猛暑は襲ふなすすべもなし　　榊原　紘子

八月の早朝歩く雑林に
聞き惜しみたるウグイスの声　　馬見塚まり子

幸不幸言わで孤愁の髪洗う
生きる溜息またも吐きつつ　　新美　京子

待ちわびた雨に緑の庭となる
遠くに見えてた田まで近づく　　大村　摯子

公園の檜に集い朝を姦し
椋鳥の羽舞い落ち来る　　木下由香理

温暖化早まりており近づくは
食糧不足と不安増しつつ　　稲葉　富子

柚子の木に今年も豊かな白き花
秋の恵みの先ぶれと見る　　山口　道子

法師蝉一声聞きて安堵せり
今夏の猛暑やっと終わりて　　山下喜美子